

5年間を振り返る

角田 慰子

(福祉学科教員)

2011年4月に着任してから、早5年が経とうとしています。思い返せば2010年11月、博士論文の審査も終盤にさしかかっていたある日、私は、大学の事務室前に掲示された1つの求人情報に見入っていました。立教大学コミュニティ福祉学部福祉学科の教員募集要項でした。それまで、卒業後の進路について考えあぐねていた私が、立教大学の要項にはなぜか惹きつけられました。今考えてみると、募集していた複数の担当科目・領域が自分の研究分野や現場経験と合致していたこともさることながら、「コミュニティ福祉」という学部名に、ある種の縁を感じていたのかもしれない。

1998～2003年までの間、社会福祉法人横須賀基督教社会館という福祉施設で、地域福祉に携わるコーディネーターの仕事をしておりました。社会館内外で活動するボランティアのコーディネート業務にはじまり、保育所の子育て支援事業や各種講座、自治会やボランティアと一緒に開催する行事の企画・運営等々にいたるまで、地域住民の方々と共に考え、地域の課題に取り組む実践の奥深さに夢中になった5年間でした。

横須賀基督教社会館は、敗戦直後の混乱した状況下にあって、1946年に地域住民の福祉的・文化的生活の向上を図る「コミュニティ・センター」として開設され¹⁾、現在もなお地域に根ざした実践を展開しています。歴史ある社会館での実践は、大学時代から知的障害児者福祉・教育を専攻してきた私の視点を大きく転換させるものでした。というのも、それまでの私は、地域生活支援のあり方について検討する際も、当事者が抱える生活上の課題や専門職による支援ばかりに目が向き、その地域で暮らす住民の立場に立って住民を支えるという視点がきわめて希薄だったのです。まずは地域の声に耳を傾けて寄り添わない限り、そこに内在している真の課題はなかなか見えてこないことも、この時の経験から学びました。

1957年から50年にわたって横須賀基督教社会館の館長を務めた阿部志郎氏は、次のように述べています。

地域福祉は「土」に腰を据え、「血」を尊重する。しかし、なおかつ血と土を乗り越

える新しい人間的、社会的な結びつきを創出する努力の体系でなければならない。それが他者との共存という意味だと思うが、いったいそれを支える哲学をどこに求めるか。それに応えてくれるフィロソフィが欲しいと、せつに望んでいる（阿部1988：65-66）²⁾。

自身も社会館の近隣に居を構え、一住民として、またコミュニティワーカーとして地域に溶け込もうと奮闘してきた著者のこの言葉が、当時駆け出しの職員であった私の胸に迫力をもって迫ってきたことを今でも鮮明に覚えています。同時に、この壮大な問いかけが受けとめられることはあるのだろうか、諦めにも似た思いを抱いていました。

しかし、立教大学でコミュニティ福祉学について自分なりに理解を深めるうちに、現場が希求する新しい道を示す学としての可能性を感じるようになりました。「土＝地縁」と「血＝血縁」への尊重心を持ちつつも、それらを大胆に乗り越え、共同性に特徴づけられる実践を支える学が、今後もコミュニティ福祉学部によって構築され、発信されていくことを願ってやみません。

福祉学科では、福祉実習教育室に所属し、社会福祉士の実習指導およびその関連科目を中心に担当させていただきました。

現場実習は、多くの実習生にとって、大学生活を通してきわめて強く印象に残る経験です。コミュニティ福祉学部の学生については、個人的に「素直で、優しくて、繊細」という印象を持っていますが、現場実習でもその特徴が発揮されていました。実習先の利用者と懸命に関わり、戸惑いながらも相手と真っ直ぐに向き合う実習生に対して、実習先の担当者からは、「利用者の傍にいて、自然と寄り添うことができますね」と褒めていただくことが何度もありました。

その一方で、「もう少しプログラム全体の雰囲気づくりをしたり、自分から意見を伝えたりするような積極性も欲しいですね」との言葉を担当者からいただくこともありました。たしかに、実習に行くまでは「勉強不足だから…」という思いが強いのか、自分から積極的に見解を述べるような学生は少ないのです。しかし、実習を終えて戻ってくると、大半の学生が実体験に基づいて活発に意見を交わすようになり、それに伴って考察力も磨かれていきました。まさに現場の力によって学生の能力が開花する瞬間でした。その集大成として毎年開催される実習報告会で、実習生のめざましい成長を目の当たりにできることも、私にとってはこの上ないよこびでした。

また、こうした生きた学びのプロセスを辿る上で、実習の事前・事後学習の一環で展開される社会福祉援助技術演習を担当させていただいたことが、私にとっては貴重な経験となりました。試行錯誤の連続ではありましたが、実践と理論をつなぐ一助として

ロールプレイや事例検討などを行い、さらに学生から直接反応が返ってくることで内容が展開していく点が魅力的でした。

研究に関しては、誠に遅々とした歩みではありましたが、博士論文から引き続き知的障害者のグループホーム構想成立史に取り組むことができました。2013年度には、学部の方の先生方のご配慮のもとに創設された立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金企画研究プロジェクトⅢの助成を受けることができました（研究課題「滝乃川学園における地域生活支援の展開過程—東京都生活寮事業を中心に」）。さらに翌2014年度には、科研費の助成を受けて、また新たなスタートを切ることができました（研究課題「日本における知的障害者グループホーム構想の成立史—制度化前史に見る連続性」基盤研究C）。その申請の際には、リサーチ・イニシアティブセンターのスタッフの方々にも大変お世話になりました。この場をお借りして感謝申し上げます。また、同年2月には、立教大学出版助成により、拙著『知的障害福祉政策にみる矛盾—「日本型グループホーム」構想の成立過程と脱施設化』（ぷねうま舎）を刊行することができました。

決して器用ではない私が、教育に携わりながら、曲がりなりにも研究者として歩みを進められたのも、立教大学の手厚い研究サポート体制のお蔭であり、感謝の念に堪えません。

着任前月、福祉学科新任助教の打ち合わせに参加させていただいた2日後に、東日本大震災が起きました。日本の社会全体が大きく揺れ動いたこの時期に、「いのちの尊厳のために」という基本理念を掲げるコミュニティ福祉学部を身を置かせていただけたことは大変有難く、継続的に復興支援に携わる先生方の後ろ姿に学ばせていただくことが多くありました。

初めての大学勤務でしたので、ご迷惑をおかけしたこともあったかと思いますが、多くの方々に支えられて任期を終えることができそうです。福祉学科だけではなく、委員会活動等を通して、スポーツウェルネス学科やコミュニティ政策学科の先生方とも大変楽しく仕事をさせていただくことができました。

末筆ではありますが、コミュニティ福祉学部の皆様、そしてこの5年間でご縁をいただいた全ての方々に深く感謝申し上げます。

注

- 1) 1980年に社会福祉法人横須賀基督教社会館より発行された『社会館の歩み—1976年～1979年版—』によれば、当時としては画期的な「コミュニティ・センター」の構想は、アジア救援公認団体ララ（Licensed Agencies for Relief in Asia : LARA)の代表を務めていた

カナダ人宣教師ジョージ・アーネスト・バット（1892～1952）によるものでした。言わば、周辺の地域住民の思いとは別に第三者の意図のもとに構想され、スタートした横須賀基督教社会館が、名実共に「コミュニティ・センター」として地域を支えるようになるまでには、30年以上の時間を要したとされています。

2) 阿部志郎.1988.「新しい福祉社会への途」.『日本の地域福祉』 1 : 58-66.